

12歳の悪役幼女に転生
しましたが、菅原様を
籠絡して助かります

ないしのかみ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

某所で投稿していた『ゲート』の二次創作です。

各話短い（大体1，000から1，500文字）のは、その仕様です（笑）。

テユエリ家が伯爵家との設定は独自解釈になります。

完結しました。読んで下さった皆様に感謝を。

目次

スタート	1
思いついたわ	4
紙でひと儲け	7
ロンデルの天才少女	10
竜の宅急便	13
錬金術	16
ある疑念	19
翡翠宮到着	23
空挺隊	27
空から来た娼婦	30
停滞	33
翡翠宮脱出	36

不時着	39
襲撃	43
ラジオ	48
転生者	51
帝都攻防戦	55
闖入者	59
スピンオフ作品	62
病床	66
決意	70
大団円	74
エピソード	78

スタート

<1>

私の名はシエリー。帝国貴族たるテユエリ家の令嬢よ。

12歳のある日、園遊会であたしは前世の記憶を思い出したの。ここがラノベ&ゲーム『GATE』（げて）の世界である事を！

あたしの前世は日本の外交官で、ああ、海外で自爆テロで車ごと吹き飛ばされたんだった。

それにしてもシエリーって、え、この子、従姉妹や亜人を散々虐める、高慢で癩癪持ちの悪役令嬢じゃない。

確か、この園遊会でも無茶ぶりを発揮して菅原様に嫌われたあげく、ゾルザル殿下の叛乱に巻き込まれて、悪所で餓死をするんだったわね。

このままだと身の破滅だわ。

私は攻略目標である菅原様とのフラグを立てに、真珠のネックレスをおねだりする為、ピニヤ殿下とお話し中の菅原様へ接近したの。

そう、真珠のネックレス。これが命綱なのよ。

両親に咎められても「やだ。真珠のネックレスを頂戴」「あたしの言う事が聞けないの」「命令よ。用意しなさい」と、我が儘放題で延々とゴネ続けるのはNG。

むしろ、頬を赤らめてロリコンであるこのおじさんを籠絡しなさい！

「菅原様、従姉妹が……」

さあ、ここからが本番よ！

<2>

ラノベ『GATE（げて） 自衛隊、彼の地にてかくハレムを築き上げり』

元々はWeb小説だったのが、出版社の目に留まって書籍化されたって良くある経緯の作品よ。ゲーム化や漫画・アニメ化もされてるわ。

銀座に突然、異次元からの門。コードネーム『GATE』（げて）が開き、やって来た異世界の軍勢を撃退して自衛隊が逆侵攻をする。

オタクの自衛官、伊丹って奴が主人公で、何故か、行く先々の女性を助けてハレムを作りながら、英雄になって行くってのが大まかな筋書きよ。

ゲーム化した際は女だけでは無く、男も攻略目標になるんだけどね。同人じゃ「イタ×ヤナ」の薄い本とか一杯出てたわねえ（遠い目）。

ま、まあ、この私、悪役令嬢シエリー・テユエリは、まだこの主人公とは遭遇前。と言うか、正確にはゲーム本編後に発売された、ファンディスク『GATE 2 自衛隊、彼

の地にて（略）、今度は幼女♪』の追加シナリオで初めて出るのよね。

フォルマル伯爵家のミユイ様なんかと並ぶ攻略対象として。

あたしのこの世界がどのバージョンの『げて』だかは分からない。

だから、原作モードで堅実に菅原様をまず攻略しておくのよ。ペドモードルートに入っても耐性が出来る様に。

冗談じゃ無いけど、もしこれから伊丹と出会ったらどうなるか分からない。目を輝かせながら「伊丹様」とシナリオの強制力で言ってしまうのかも。ぶるぶる。あ、悪寒が！

やっぱり沢山の中の一人より、正妻の座を勝ち取った方が私的にまだ良いからね。子供の私では聖下やエルフ。導士様みたいなのを相手にしたって敵う訳ない。

だからこのペドルートは鬼門なのよ。絶対分岐しちゃいけないわ！

思いついたわ

<3>

真珠が届きました。幸いにして私は上手く菅原様ルートへ分岐出来たみたいですが、でも受け身ではいけません。私は実家の史料を取り揃えるとゾルザル殿下の叛乱に備えます。私ですが、両親も死んで貰っては困りますからね。

「テュエリ伯爵領で動員可能な軍はこの程度。竜騎兵は水準以上だけど歩兵の数が圧倒的に足りないわね」

私はネックレスの箱を包んでいた包み紙で鶴を折りながら嘆息します。王都脱出のルート選定は棲んでいます。問題はその後です。

我が領地は山岳で農地に乏しく、林業と鉱工業で収入を補ってる土地柄。いい騎竜の産地として知られてるから騎竜部隊が多いけど、後は精鋭の山岳歩兵。山地では役立つはずの騎馬部隊は皆無（戦力にならぬ伝令と荷駄隊は居ますけど）。大体が守備中心の軍備で規模もせいぜい千人。攻撃に回ると見劣りは否めません。

「うちの山岳兵、ヘリコプターでもあれば強いんだけど」

無い物ねだりなのは分かってますけどね。

高い所平気だし、ザイルを使って断崖絶壁に挑めるから。単座が基本の騎竜にもっとキヤパがあれば、落下傘を開発して空の新兵もどきも可能なんだろうけど…。あれ？

折り紙を解く。そして別の形を折り上げてつうと投げる。

「これか」

両親に無理を言つて人材を集めて貰い、私は早速、思いついた計画を実行に移しました。カーゼル公爵にも根回しを行い、万が一に備えて兵力を動かせる様に進言します。

「菅原様。日本とは帝国にとって未知なる軍事強国なのです」

無論、菅原様の籠絡も忘れません。いざとなれば翡翠宮へ立て籠もる命綱ですからね。それに顔立ちは好みですし、物腰も柔らか。及第点は与えられます。

前世の私から見れば同僚で後輩です。

でも、あたしは個人関係の記憶が薄いんですよね。例えば名前とか、両親とか家族とかの関係が思い出せない。何故なのだろう。

<ここで解説>

かなり設定にオリジナル入ってます。テュエリ領の設定は言及されてないので、日本で言えば木曾みたいな山岳地帯とでっ上げさせて貰いました。

名馬ならぬ名竜の産地で、領内は険しい山地を飛び回る騎竜部隊と山岳歩兵部隊中心の警備隊が治安維持しています。金食い虫なので規模は少数精鋭。山賊退治や遭難救

出に特化してます。

だからテュエリ伯軍は山や森に立て籠もると強いんですが、平地でのローマ式軍団戦には全く向きません。治安維持部隊ですからね。

悪役令嬢は何か思いついた様子です。

菅原の方は「菅原様」連呼で、妻になろうと売り込んでいる所。

紙でひと儲け

<4>

「シエリー様。ミード・ルナ・トデイを発見しました」

開口一番、筆頭メイドからの報告に私は飛び上がったわ。ロンデルの天才セイレーンが本当に存在していたのね。

「既に招聘の人員を手配しております。それとアガベ・エル・マデイラが参っています」
悪役伯爵幼女のシエリーです。色々と次の手を打ってる最中で、今は領地から人を呼んだ所です。私は「ここへお通しして」と告げると立ち上がったの。

アガベは領地にいる職人で、がっしりした体躯を持ったドワーフよ。挨拶もそこそこに本題に入るわ。

「試作品の出来具合は悪くないわ。白さが足りないのが物足りないけど、これはおいおい解決するとして量産化の目処は付いたのかしら？」

「そこは抜きありやせん。まあ、イタリカから流れてくるブツにや敵いませんが、うちは価格で勝負つて所ですな。今の所、材料は供給にも問題なく、費用も只同然」

良い傾向ね。試供も兼ねて商店に卸した分も好評だったし。

「吹き流しの方は？」

「お嬢様の指定通りに作りやした。そちらも問題ありやせん。しかし、竜騎士の方が扱いに手間取ってますぜ」

「まあ、慣れて貰うしか無いわね。数は揃えられて？」と会話を交わした後、親方は退出し、私は菅原様とカーゼル様へ文字通り『手紙』を書く。

そう、紙よ。戦争には資金が要る。だから製材から出る大鋸屑をチップに再利用して製紙をやってみたの。ざら紙で日本製に比べれば品質は今ひとつだけど、羊皮紙と比べれば段違いよ。

菅原様宛には恋文。カーゼル様宛にはゾルザル殿下の私兵が動き出す前に、議会で特別法潰しを画策して欲しい旨を書き記したわ。

「でも『GATE(げて) 自衛隊、彼の地にてかくハーレムを築き上げり3 』今度は導士様々』まで反映されるなんて…」

ミードはゲーム続編の登場人物なのよ。

もしかしたら私以外の転生者だって居るかも知れないと思って各地に密偵を放ったのだけど、はあ…大当たりね。

<ここで解説>

転生悪役令嬢が領内の内政に動き出しました。

特産品として森林資源を活用して『紙』を売り出します。わら半紙よりもやや上等の代物ですが、羊皮紙しか無かった特産品では驚異の発明商品かも。

元老院を利用して掃除夫の設立を阻止しようともしていますが、シエリー自体が議員では無く、父とカーゼル侯爵頼りの間接関与しか出来ないのがネック。こちらは苦戦する気配です。

オリジナルキャラが出始めてますが、原作キャラと違ってどの様に動かしても問題ないので楽です。仮に死んでも文句来ませんからね。

一応、キャラ名はお酒の法則（ミードⅡ蜂蜜酒。アガベⅡ竜舌蘭酒。トウデイⅡ椰子酒）に従って命名してます。

ロンデルの天才少女

<5>

「で、あたしい、何でこんな所に居るのかな?」

目の前で桃色頭から生える白い一本羽根をかりかり搔きながら、半ば強引にロンデルから連れて来られたセクシーなセイレーン少女がぼやく。

巫人嫌いの貴族がもし居合わせたとしたら、不敬罪で確実に死刑になりそうね。

「テュエリ伯令嬢、シェリー様の前である。ミード・ルナ・トデイ。言葉を慎め」との筆頭侍女の言葉も意に介さず、「あー、早く済ませくれないかなあ。論文書かなきや拙いだよね」としれつと言つてのける彼女は、ロンデルの天才少女と称される導師。

でも現時点では博士だけだね。魔法都市ロンデルに住む学究の徒らしく、やつぱり変人の類よ。

アルケミストを自称して今は薬学で名を上げてるけど、本来は冶金やら機械の方に興味があるつて言うんだから怪しいわ。特に稲妻に関する再現装置の考察とか、特地の人に理解出来るのかしらね。

「テュエリ家が貴女を丸抱えしたいつて話なんだけど、興味ないですか?」

と告げると「あるよ。あるある。んー、でも研究以外で拘束されるのは嫌かも。むう」とミードの葛藤が始まったわ。

けど乗ってくるでしょう。貴女は研究で多額の借金があるのは調査済みだからね。

「でも領地が山地だろ。あたしはいつか、風の精霊魔法で自由に動く帆船を作りたいんだよねえ。『オール要らずで、すいすい移動君』って名も考えてあるんだからあ」

その名付けセンス。貴女は『ああつ、時を巡る三姉妹』の末っ子か、『ご奉仕、ご奉仕なスペシャリスト、某メイド隊』のマッドサイエンティストですか。

「幾つか論文を読ませて貰いました。電：もとい、特に新しい化粧水は実に素晴らしかった。是非とも製品化したいわ。そうね。製造権の買取費の他、利益の1%は貴女の取り分で…」

「そこまで言った途端「やるっ！」と即断。

話が早くて助かるわ。

「でも、お嬢様は伯爵では無くて伯爵令嬢だろ。君が雇用費を本当に払えるのお？」と続ける所はシビアね。

「ごもつとも。でもあたしは少し前まで我が儘放題の悪役令嬢。両親はお金に關しては結構甘々だし、今は製紙を元手に自分で稼いでるからね。軍資金にぬかりないわよ。

手付けとして金貨を一枚出すと、彼女は口に頬張って本物か否かを確かめたわ。

「バレンタインデーのコインチョコレートだとも?」

歯形の付いたコインを取り出し「ああ、失礼。って、あれ、今二月だっけ?」と謝るセイレーン。

私は心中で転生者発見の賭に勝ったのを確信したわ。

その後、彼女が化学方面に応用が利くのを確かめた後、無事に雇用に成功する。こんな危険な逸材、他人に渡してたまるもんですか。

<ここで解説>

ミードのモデルは女平賀源内です。イメージは桃色の小桜インコ系セイレーン。錬金術師を自称しています。

竜の宅急便

< 6 >

「菅原君」

菅原様の後ろをちよこちよこ歩く私を見とがめたみたいです。私は優雅に白鳥副大臣へ一礼し、後ろへと控えました。

「議会へ働きかけが露骨すぎて、内政干渉に当たるとは思われないかしらね？」

「私はシェリー嬢を仲介して、有力諸侯へ意向を伝えてるだけです。そこから先は与り知らぬと突っぱねる事も可能ですが？」

そう。あたしは新しい『紙』の宣伝も兼ねて、帝国元老院議員達へ手紙を送っているの。まあ、その中に政治に関する文章と「と、菅原様も申しておりました」と言う一文が入ってるだけよ。

決して菅原様自身が直接、要望を伝えている訳ではありません。差出人はあくまで私ですからね。

「詭弁ね」

「詭弁です。しかし、それが外交ではありませんか？」

副大臣はため息をついて、菅原様から私へ向き直った。

「まあ、議会の情報もシェリー様を通じてこちらも掴んでいる訳だし、例の悪法、延期されたのも貴女の功績ね」。

でも「いえいえ、全ては未来の夫の功績です」と持ち上げておこう。

オプリーチニナ特別法は廃案にならなかった。ただ、延期されたわ。陛下の回復まで時間を稼げるかが勝負になった。

王太子は身辺固めを着々と進め、私兵集団は私の知る時よりも質、量共に強大な規模になりつつある。噂では怪異も扱ってるとか。

こちららも動員を急いではいる。けど、王族と地方領主では基本的にどうにも差が出る。講和派の体制が整う前に、ゾルザル殿下は特別法を通してしまいうに違いない。

「そうそう。テユエリ伯は、いいえ、貴女は面白い事を始めたそうね。飛竜の商利用とか、評判になってるわよ。帝国辺境までなら帝都から一日で手紙を届けられるとか」

「菅原様にお聞きした宅急便を参考に致しました。竜は開発維持費が高いのです。後生大事に飼うよりも、転用して稼ごうと思った次第ですわ」

本当に軍竜は育てるのが大変よ。ただ騎乗して飛ばせるだけでは済まない。弓や槍袞に怯まない胆力を持たせなければ使い物にならないから、十頭の内、軍竜になれるのは一頭程度だと言われているわ。

残りは伝令用にしかならないけど、伝令竜ばかり増えても財政を圧迫するから普通なら廃竜処分。でも、これを民生に転用すれば？

空飛ぶ宅急便の出来上がり。無理すれば人だつて運べるしね。帝国軍からも戦闘用として失格だから、戦力としても脅威にならないつてお墨付きも頂いたし。

馬鹿よね。直接戦闘に使えなくたって、航空部隊つて使い道はあるのよ。

<ここで解説>

多分、『小荷物なら、早くて便利なテユエリ便』とか宣伝してますね。

軍馬もそうだけど、軍用動物つて育てるのは本当に大変みたいです。本来、動物は臆病ですからね。明らかに怪我しそうな矢玉の中を走れる様に調教しなきゃ、軍馬つて役に立たない。火器が発明されたらされたで、恐ろしい銃砲声に怯まない様にしつけないと主を放り出して逃げてしまいますからね。

錬金術

<7>

二頭の重飛竜が羽ばたく。細身の軍竜と違い、如何にも鈍重で重々しい動き。ただその分、力強さはあるわね。ぴんと張った頑丈なロープ（鉄線が編み込まれてる）に括り付けられた双胴の『吹き流し』がずるずると地面を滑り出し、やがて空を舞う。

「おー、お嬢様の経験が役に立ったねえ」とミードが囁く。

「琵琶湖で使えたカーボン他の素材があつたら楽でしたけどね」と苦笑する。滑空機部門とか懐かしいわね。

こんにちは、悪役少女のシエリーです。今は避暑を名目に両親達と里帰りして、領内にて『吹き流し』こと滑空機、つまり竜に引つ張らせるグライダー訓練を見学してます。

前世で某飛行コンテスト用に設計したのに比べると、木枠に羽布張りでスマートさの微塵もありませんが、こちらは競技機ではなく貨物輸送用ですしね。

「空挺隊かあ。早速、編成するんだろ？」と無邪気に尋ねるセイレーン。

それに対し「機体は揃いましたけど、肝心な人員養成が追いついてません」と答えます。曳航用の竜騎士もそうだけど、特に滑空機のパイロットが十指に足りないのよね。

軍の方も新設の空挺隊を胡散臭がるから、商用だと開き直って民間から雇用している最中よ。実際、軌道に乗ったら小包便の料金低下を見据え、これを小荷物輸送用に転用する計画だしね。

「任せて貰えるなら人材のアテがあるよ」とミード。但し、「亜人ならって条件は付くけどさあ」と続ける。

竜人や翼人など『飛ぶ』と言う感覚を持つてるのが良いらしいわ。鳥目ゆえの夜間飛行の事は考えない事にしよう。

「鉱山の方は順調らしいわね」

「発電機増やして電解槽の規模を大きくしたいね。ほら純銅と金の地金が出来たよ。発破の方はこれからかな。石鹼作るグリセリンの副産物としてニトロ口なら用意出来るけど、どうせ作るならやっぱり無煙だよねえ」

何か物騒な事を言ってるわね。

私はミードから手渡された輝く純銅板と小さな金地金を眺める。電気精錬。これで金山のない我が領地から金を産出する錬金術が整ったわ。

「お嬢様。帝都のカーゼル候から急報です」

筆頭侍女が駆け込んで来て手紙を渡す。私は一読すると隣のセイレーンに声を掛けた。「この成果をお父様達に報告して下さい」と。

「え、まだ採算に乗るまで秘密にするって話じゃ…」

私は手を挙げて言葉を遮った。

「帝都で政変が起きそうです。この金産出に驚愕したお父様は、数日は視察などで領地に留まる事になるでしょう。それを利用して私は一足先に帝都へ行きます」

悪法の延期は三月と持たなかつた。業を煮やした殿下は戦時強権を発して元老院議会の停止を宣言したわ。恐らく、これからクーデターで軍を掌握するでしょう。

「…カーゼル候、今、行きます」。

私はドレスから騎竜装備に着替えると、帝都へ向かう飛竜便に同乗して空の上の人となつた。

<ここで解説>

エレキテルじゃあ（笑）。

電気精錬を使えば銅山からも金が出ます。まあ、ほんの僅かなんですけど塵も積もれば何とやら。実験装置の規模では採算ベースには程遠いですけどね。

水車で発電機をえんやこりやと回すより、落差を使つて一気に発電した方が効率良いんですが、今のシエリーではこれが限界。

ある疑念

< 8 >

「いやな雲行きだ」

カーゼル侯爵の眩きが憂鬱さを更に深めます。

天気は曇り。

こんにちは悪役幼女のシェリーです。

カーゼル侯爵を我が家に招いた後、間髪を入れずに脱出しました。原作通りだと、掃除夫がやって来て両親が殺され、我が家も全焼してしまうからです。

ただいま絶賛、逃避行中になります。幸い、両親は帝都不在です。私は使用人達に暇を出すと、すかさずカーゼル侯爵を連れて地下に潜りました。

悩みましたけど、翡翠宮へ逃げ込む為です。

ここは原作通りに行くか、それとも別のルートを辿るか悩む所でした。フラグ的に危険な所があるのですが、菅原様の事を考えればやるべきと決断したからです。

幸い、早めに行動した為か、『GATE』（げて）で突破に苦労した包囲網はまだ形成されていません。

そして、あらかじめ食料も水も多めに携帯してますからね。あの真珠のネックレスを失う事もないでしょう。

「帝国兵だ」

しかし、幸運が続くのも最初の内だけでした。

「あと少しで翡翠宮なのに…」

そう、前方の道路に皇子子飼いの掃除夫と、帝国兵がピケを張っていたのです。候と私は茂みに隠れると様子を窺いましたが、動きはなく、夜になるまで近くのあばら屋に潜伏する羽目になったのです。

あばら屋に隠れていると、嫌な物が目に入ります。

皇子は遂に人食いのジャイアントオーガーを市井に投入して来ました。

ガウガウ言いつつ、それが帝都の中を徘徊してる光景は悪夢です。

同時に疑念も浮かびます。あれは原作ではかなり後に投入される物なのでは…。

「正直、頭は正常なのかと皇子を疑いたくなるよ」とカーゼル候。

「オーガーの統制がいつまでも取れるとでも考えておるのだろうか。もし自分の方が周りの兵より強いと認識してしまつたら…」

私は頷きます。

「手綱のない猛獣が市中で暴れ回って、始末に負えなくなりますね」

でも不謹慎ですが、「そうやってくれた方が脱出する我々には有り難いですよね」との言葉を私は押し殺しました。

考え方が悪役ですね。ゲーム内での悪役幼女との役割を超えて、自分の本質が外交官として、悪党寄りの思考になっているのではないかと自問自答します。

例えば、私は菅原様の事を本当に愛しているのでしょうか？

自分が助かりたい為、便利な駒として利用しているんじゃないでしょうか？

との暗い想いがわき上がってきます。

「どうした。シエリー」

カーゼル候の声。はっとして私は現実に戻ります。

「いえ、なんでもありませんわ」

そう答えて、私は頭の中の疑念を振り払いました。

〈ここで解説〉

原作との差異が目立つのは、シエリーの工作のせいだけでは無いかも知れません。

悪役令嬢っぷりが出てまいりました。でも、元々の彼女も純粹無垢な善人だとはとても言えない、陰謀策術の手練手管を使うキャラなので、案外貴族としては普通なのかも知れないですね。

あ、原作と言っても『GATE』（げて）の方のシエリーは単なる我が儘馬鹿令嬢です

よ
(笑)
。

翡翠宮到着

<9>

色々あつてカーゼル候と共に、無事に翡翠宮へ辿り着いています。菅原様が保護を決断してくれたお陰ですね。

戦端は開かれてしまいましたが、取りあえず今は小康状態を保っています。

到着した帝都は酷い有様でした。講和派議員は殿下の私兵に有無を言わず引つけられ、拠点となりうる建物は放火されました。

幸い、私兵の他に帝都防衛軍でゾルザル殿下側に加わった部隊は近衛中心で、周辺に駐屯する竜騎兵部隊とかは將軍達の離反で中立を保っています。

これは時間稼ぎの間に行った講和派議員の工作が実を結んだ形ですね。

ただ、このせいで帝都に有り得ざる化け物が徘徊しているのを目にしまいました。

ジャイアントオーガ。鎧に身を包み、鉄の棍棒を持った怪物。皇子は兵力不足を補う為、こんな物を動員したのです。

前にも言いましたが、何を考えているのでしょうか？

「あれをこっちにも投入する可能性が出てきましたね」と菅原様。

あたしの知る『史実』ではそれはなかったのですが、私は歴史を改編させていますから充分に有り得る事態です。薔薇騎士団の精鋭も、あの怪物相手ではどうなるか分かりません。

他に意外だと言えるのが、翡翠宮に自衛隊がいる事です。

ゲームでは主人公の伊丹率いる分隊とハーレムが取り得る選択肢に、『部下と共に翡翠宮へ』『ハーレム率いて資源調査へ』『即売会に備えてアルヌスでゴロゴロ』の三つが出た筈だと記憶していますが、伊丹の姿はなく、代わりに朝霞一尉って人が指揮しています。

これも改変の結果なのでしょう。

正直、伊丹主人公編で出会うとシェリーが菅原様ルートに入っても、好感度が上がって、私が伊丹のハーレム仲間になってしまうので、出会わなくて良かったと胸をなで下ろします。

確かここで亜人を差別して虐める高慢なシェリーに伊丹がビンタを食らわして諭し、伊丹のハーレム女達に出会った結果、今までの価値観を改めて性格が矯正されるんです。

って、マゾですか私。

それはともかく。自衛隊と言ってもやはり分隊で、準備万端で装備を整えて来ている訳では無いので装備は軽装。保有する弾薬を節約する為か、無闇に発砲しません。

つまり余り戦いに関与は出来ないって事です。

ただ軽装甲車だけは勇ましく走り回って、芝生に足を踏み入れた掃除夫達を跳ね飛ばしています。

運転手は「おらおらあ、轢かれたくなけりや、直ちに日本国領土から退出しやがれ！」とか拡声器で怒鳴ってますね。あそこだけ世紀末バリバリ伝説みたいですよ。

弾薬と違って、ガソリンには余裕があるんでしょうか。他人事ながら、心配してしまいますね。

「ピニャ殿下と皇帝陛下が気になるな」

籠城三日目。カーゼル候は情報途絶に渋い顔です。日本側は菅原様すらも情報統制して、こちらへ話を伝えてくれません。

でも仕方ありませんね。外交とは本来、友好的な顔をしつつ、後ろ手に短剣を握って隙を見せずに交渉する物なのですから。

<ここで解説>

軽装甲車。多分『パト労働者』の太〇みたいのが運転してますね。

調べたんですが、あれに車載してるミニミの予備弾倉数って分かりませんでした。ま

さか、銃側に付いてる一個だけって事は無いよね。
でも、自衛隊ならありそうで怖いんですけど。

空挺隊

<10>

「伊丹よう……じ？ 二重橋の英雄なら、伊丹浩司だよ。名が間違ってる」

第七偵察隊々長の朝霞一尉は不思議そうな顔をして問い返したわ。その言葉に私は頭を殴られた様な衝撃を受けましたの。

こんにちは。翡翠宮のシエリーです。

ラノベやゲームで主人公を張っている伊丹一尉と言う名の陸尉は存在する。

でも、名が違う？

「シエリー嬢は名を間違えて覚える事が多いんですよ。初見の時、『白鳥』副大臣を『白百合』様と呼んでた位ですから。日本語の発音がまだまだなんでしょうね」と菅原様。え、待って。私（現世）じゃない、あたし（前世）の知る情報と微妙にずれがあるわ。呆然とした私を脇に置いて「救援の派遣が延期された」だの、「やつぱり、今の内閣は内閣は弱腰ですね」だのを、一尉と菅原様が話し込んでいますね。

「帝国正規軍が動いてない以上、視察の外国武官やマスコミの目もあるし。このまま籠城しても守り切れると判断した様子ですね」

「思った程、講和派議員が虜囚となつてないのも理由ですか。これはカーゼル候やシェリー様のお手柄ですが、かえつて強攻策を採りづらくなつたのは誤算でしたね」

そう、今の所、相手は帝国軍ではなくオプリーチナ。

これが正規の帝国軍なら戦争状態になつているけど、これは殿下の私兵、つまりただの愚連隊。

ナチスが政権を取る前の突撃隊が、勝手に暴れ回つてる様な物なの。それを正規軍たる薔薇騎士団が守っているのだから、自衛隊としても内政不干渉の立場を取つて軍事行動は取りずらいのよね。

そして私の勧告に従つて、有力な講和派議員達は事前に護衛を揃えて自衛するか、帝都から家族を領地へ待避させている。だから捕まつた議員の数は『史実』より遙かに少ないのよ。これが自衛隊が監獄開放作戦を躊躇う理由の一つ。

「食料が足りないのが目下の問題ですね」と一尉が呟く。それを私は「それは問題ありません」と答えたわ。故郷を出た際、あたしは幾つかの指示を下してきたからだ。

「空挺隊に糧秣の輸送を手配してきました。間もなく届くでしょう」

テラスへ出る。

良いタイミングで水平線から大きな影が幾つも飛来するのが分かつたわ。

帝都防衛軍の騎竜部隊には手を回してあるので、翡翠宮上空までの針路は確保されて

いる。

鈍重な空挺隊が騎竜の迎撃を受けたら一溜まりも無いからね。

計9機の双胴滑空機が低空をパス。そして後部ドアから翡翠宮の中庭へ、梱包された荷物がどさどさと落とされる。

訓練が行き届いてれば、ここで強行着陸して中から空挺兵がつて展開になったんだろ
うけど、竜に引つ張られた編隊はそのまま一航過すると帝都外へ飛び去って行くわ。

翼を広げた一つの人影を除いて。

<ここで解説>

滑空機の形式はG o 2 4 2 かク7 辺りだと思つて下さい。双テイルブーム型は空中
投下が楽なんですよ。

無論、それより規模は小さいですし、羽布張りで外見も不格好です。

空から来た娼婦

<11>

滑空機から飛び降りた人影は庭にふわりと降り立つと、狙撃を警戒して腰をかがめてこちらへと走る。

私は「あの方は怪しい者ではありません」とフオローして、薔薇騎士団の警戒を解かせるが、それでも誰何されて取り調べを受けている模様ね。

「テュエリ空挺隊のチチだ」

妖艶さを醸し出す雰囲気な翼人の女性だ。

前世で言うなら到底服とは思えない、ピンク色したセパレーツの水着みたいな衣装を身に付けた、煽情的（せんじょうてき）な姿をしているわ。おへそなんか丸見えよ。

「シエリーは居るかい？」

「ここです。良く来て下さいました」

私は階下へ降りると手を振る。

「はん、あたいもミードからの話を聞かないと来やしなかつたよ」

鼻を鳴らす美女は、民間から雇用した人材の一人、翼人のチチ・モスコームユール。

この格好からも判るけど、元々は娼婦よ。でも出自に似合わぬ、読み書き計算が出来る高い能力を持っているのよ。

「荷の目録は？」

彼女は畳まれて、しわくちやになつた目録を取り出す。

「(ハハ)さ。乱雑に書いてあるけど読めるだろう」

目録を確認すると殆どが干し肉や小麦粉。

お酒は嵩張るし、投下時に樽が割れそうだから省いたらしいわね。代わりに茶がある。軽い物優先だ。

「ああ、目録にはないが、柑橘類も少しだけ持って来たから『壊血病』対策は大丈夫だろう」と話し合いながら翡翠宮を案内し、与えられた一室へ入る。

『壊血病』ですか。やはり：貴女も」

これは特地には存在しない現代知識だ。ビタミンCの欠如による健康障害。

「ああ、亜人嫌いのあんたがどう言う風の吹き回しか、次々に亜人を雇用し始めたのを探る為に潜り込んだが、あんたも転生者なんだね」

周囲に他者が居ないのを確認して確かめると、彼女もあつさりと転生者であることを肯定したわ。

変な文字を使うとの噂で目星は付けていたけど、やっぱりか。

「ええ。でも、チチと言う名のキャラに心当たりがありません」

チチは煙管を取り出すと、近くの燭台で点火する。

「はん。そうか…そーいや」

は？ 指折り数えだした翼人に私は目が点になる。

そんな私を無視してチチは続ける。

「あんた、まだ初めてなんだ」

「え、ちよつと待って下さい。話が…」

私は彼女の発言を止め、詳しく尋ねる。

「じゃ、詳しく話すのは止めておくか。自分でそこまで到達しないと意味は無いからね」

そのまま煙草を一服。紫煙の香りが部屋中に漂ったわ。

<ここで解説>

チチはお酒命名法に従ってカクテル名です。

でも、文字通り乳もあります（笑）。

ついでに、モスコミュールもカクテル名。

停滞

<12>

翡翠宮の対峙は続いています。

日本の政治状況は混迷を極め、未だ有効な対策が出るに至っていません。

「自衛隊の本格派遣は……やはり」

菅原様が苦虫を噛み潰してます。日本側も機密漏洩に心血を注いでいますが、それでも外務省職員と自衛隊員達との会話から、ある程度の情報は漏れ伝わってきます。

国会が紛糾して身動きが取れないのです。

曰く「一週間も籠城出来たではないか」

曰く「向こうも大使館を強攻する様な策には出まい」

曰く「バスーン刑務所を落とさなくとも、充分講和派議員は確保出来る」

曰く「戦争反対」

曰く「異世界から撤兵を！」等。

野党からすれば、現在の翡翠宮の苦境なんて内閣を攻撃する材料に過ぎないんでしょね。首相に対して無駄な質問とか、口撃を繰り返して国会を空転させています。

多分、『帝国軍の攻撃で、翡翠宮の邦人に死者が出ればいい』とも考えてますね。特地へ自衛隊を派遣した内閣を攻撃する絶好の材料になりますから。

野党にとって、外務省職員や自衛隊員は『忌むべき日本政府の手先』で、守るべき国民の仲間には入ってませんからね。

翡翠宮のシェリーです。

「ふん。何度、尋ねても同じさ。あたいは答えを出す気は無いよ」

チチ、娼婦上がりの翼人の態度は相変わらずでした。「初めて」の意味を尋ねても答えられません。

「では、違和感があるのは…何故でしょう」

これは原作に対しての話です。パズルに例えるとあるべきパーツが食い違っている。キャラ名が微妙に違ったり、見知らぬ人物が出てきたり。

それを説明し終わるとチチは「ゲームを何処までやってるんだい？」と、ベン回しの要領で、煙管をくるくる回しながら尋ねます。

「フアンディスク3までです」

煙管の回転が止まりました。片手で煙管の羅字（らう）をしごきながら、火皿へ刻み煙草を詰めて行きます。

「違和感はそれだね。元々の原作じゃ、あんた（シェリー）はただの脇役。でもゲーム化

されてからはPC（プレイヤーキャラ）として使える様になった」

おもむろにマツチを擦つて点火。煙草つて苦手ですいませんけど、前世がスモーカーだったから耐性はあります。

「この時点であなたに関する記述や、裏設定みたいなのが後付けで膨大に作られた。ここまではいいかい？」

私は頷く。原作では単なる脇役で、悪役的な性格も矯正されずに死んでいる。

「だけど…」

そこへ、バタバタと駆け込んでくるのは菅原様。

「シエリー、用意しろ。やっと自衛隊が動く！」

「ええっ」

停滞していた事態が動き始めました。

<ここでも解説>

本作の国会や政治家はフィクションです。

その描写等、現実の如何なる団体とは無関係です。

と、一応書いておこう（笑）。

翡翠宮脱出

<13>

自衛隊は原作よりも派手に動けませんでした。

落下傘部隊は投入取りやめ。

バーストン監獄の襲撃は中止。

唯一、翡翠宮救出のみが作戦内容との事です。

シエリーです。遂に自衛隊による救出作戦が開始されました。

「ヘリボーン主体だね」

チチが空を見上げています。周囲はローター音がバタバタと煩いです。

地上部隊を投入せず、大型輸送ヘリを強行着陸させて人員を空輸するのが骨子みたいです。当然、敵阻止の為に武装ヘリも伴っていますね。

朝霞一尉達も今までの鬱憤を晴らすかの様に、発砲制限を解除しています。最後まで留まって、残して行く装備を破棄するのだそうです。

軽装甲機動車、ヘリに吊して持って行く暇がありませんからね。勿体ないですが。

ぱんっ、ぱんっとな乾いた音。

銃声って遠くから耳にすると迫力無いんですね。すぎゅーんとか、どきゅーんとかの音を期待してましたのに。

「よしつ、副大臣達がテイクオフ」

「次、シエリー。おいで」

菅原様に抱きつきまします。あたしの乗るへりは直前に飛んでいったのと比べると、だいぶ小型ですね。U H 1でしたっけ？

「C H 47じゃないのか」

「あれは二機だけです。残りはイロコイで我慢して下さい」

菅原様が尋ねると、大袈裟に肩をすくめてパイロットが答えます。

大型輸送へりは薔薇騎士団輸送用で既に満杯だそうです。本当はもつと投入したかったのだそうですが、用意が出来なかったらしいですね。

「上手く行きそうだねえ」

状況を眺めて口にするチチですが、パイロットの「禁煙だ」に対して、慌てて煙草を消しています。

へりは上昇を開始しました。

外を見ると脱出を阻止しようとする掃除夫達も必死ですが、政治委員が声を張り上げるだけで腰が引けてしまっています。士気が低くて助かりますね。

しかし、罅があかないと見たのか、敵は遂に切り札。ジャイアントオーガーを前線へ投入してきたのです。

「菅原様っ！」

凄い衝撃。オーガーの投げた棍棒が私のへりに直撃したのです。

直後、軽装甲機動車から曳光弾が連射され、ミシン目の様な跡がジャイアントオーガーの身体に穿たれました。でも、威力が弱いのか倒れません。

咆哮を上げる怪物をかすめて、あたし達のへりはよたよたと飛んで行ったのでした。

<ここで解説>

ジャイアントオーガーに対して5.56mm弾は威力不足。鎧は貫通可能でしょうけど、分厚い皮膚と筋肉に止められてしまいます。

もし、LAVの車載武器がミニミではなく、12.7mmのM2キャリバーであったら結果は違っていたでしょう。

不時着

<14>

墜落と言うのでしうか。或いは墜落？

呼び方はとにかく、私達の搭乗機は不時着してしまいました。

離陸直後にコクピットに飛び込んできた巨大な棍棒は、パイロットを即死させてしまったのです。操縦系統もおかしくなってしまった模様で、副操縦士の方が必死に操作して、どうにかヘリを軟着陸させたのです。

「ええと…貴女は」

「習志野三尉です」

そう答える副操縦士の方は女性でした。菅原様は動かなくなつたパイロットの肩を揺すり続けている彼女に、残酷ですがこう促します。

「習志野さん。残念だがパイロットはもう駄目だ。早めにここを離れた方がいい」と菅原様。

帝都の中に墜落してしまった私達は、ここから帝都外に脱出せねばなりません。

「でも、このまま遺体を残して行くのは…」

心情的には判りますね。

「あたいらには運ぶ手段がないよ。残念だけどね」

そう答えるチチは機内にある物を物色しています。非常食や飲料なんかの、これからの逃避行で役に立ちそうな品物ですね。

「こいつも持って行くか」

大きめの拳銃みたいのを発見して翼人はホルスターごと身に付けました。ついでに「パイロットの拳銃も持って行きな」と菅原様にも指示します。

「本当は非戦闘員が武装するのは拙いんだが……」との眩き。でも、敢えてその提案を拒否しません。抜き取った拳銃をズボンのベルトへねじ込みます。

習志野三尉も覚悟を決めたらしく、同僚の認識票（ドツグタグと言うそうです）を回収して、ヘリを離れます。

お久しぶり、悪役少女のシェリーです。

只今、何とか城壁を超えて帝都郊外を歩いています。警戒網を抜けるまでは紆余曲折ありましたが、翼人が加わっているのが幸いして、空路で何とか脱出出来ました。

チチに言わせると「あたいの体力じや、運べるのは一人が限界」なのだそうですが、闇夜を利用して何往復かし、どうにか無事に帝都から脱出です。

但し、自衛隊本隊が待機している門ではなく、別方向に出てしまった為にひたすら足

を酷使して、味方との合流を目指してる最中なのです。

「アルヌス方面の街道に出られれば…」

「そりゃ無茶だろ。自衛隊の作戦時間とはとくに終わってる。既に撤収してしまってるだろうから、下手すりゃ帝国軍が出張ってる可能性も」

歩いてる間にも、方針を巡って議論が重ねられていますね。

「シエリーは何か意見はないですか？」

菅原様の問いかけに、あたしは足の痛みを我慢しながら考えます。

「ええと…」

確かに自衛隊の作戦時間終了はとくに過ぎてます。確か18時半でしたよね。

今は夜中の2時過ぎです。私達の為、ギリギリまで待つてくれたとは思いますが、時間を延長して待つてくれると考えるのは、どう考えても希望的観測ですね。

と、急に身体が持ち上がりました。驚いて確かめると菅原様が私を横抱き。いわゆるお姫様だっこしてくれているではありませんか。

「済まない。シエリーの事に気を遣う配慮に欠けていた」

確かにあたしの足は悲鳴を上げていました。ろくに運動もしないお嬢様の足です。ここまでの強行軍に血豆や靴ずれが出来ていたのでした。

「菅原様…」

顔を赤らめてしまいましたね。この気持ち、どうしたのでしょうか？

<ここで解説>

チチが手に取ったのは9mm機関拳銃です。

マイクロUZIもどきと評される珍品ですが、これを現実自衛隊がヘリの機内装備品にしているのかは定かではありません。

でも、弾をばらまけるだけ、同じ様な射程のSIGよりは頼りになるかと。

襲撃

<15>

結局、アルヌス方面へ出る案は危険度が高いという結論で廃案。

私の実家、テュエリ領へと向かいます。

途中、折角整備した飛竜便の事務所が帝国軍の手で焼き討ちされていたり、かなり憤りを覚えましたけど、どうにかこうにか歩み続け、気が付いたら既に一週間。

帝国軍に発見される事を恐れながら、領地へ近づいて参りました。

『自衛隊の翡翠宮救出作戦失敗!!』

『殉職者でる!』

センセーショナルな見出しですね。

後に知ったのですが、これは私達が荒野でさまよっていた初日、翌朝の新聞の一面だそうです。

いえ、翡翠宮脱出自体は成功してるのですよ。ただ、作戦に犠牲者が少なからず出てしまったのが、マスコミに火を付けてしまった様です。

ヘリパイロット（後に湯布院一尉との名を知りました）と、最後まで撤退援護してく

れた朝霞隊の半分が散ったのです。

まともにも考えれば、こつちが全く犠牲者無しで相手が被害甚大なんてのは、夢想も甚だしい物だと思うのですが、アルヌスの丘で膨大なキル・レシオを稼いでしまった日本人にとって、戦えば自分達が無傷であるのが当たり前になってしまっていた様です。

剣と弓しかない野蛮人は、こちらを傷つける事も叶わず、銃器の前に一方的にやられて行くだけ。とでも思ってたんでしようね。

でも、この事態は日本を激高させました。日本人は一旦怒り出すと流れががらりと変わります。

日本はこれまで押さえていた戦力の増強を開始しました。

こんにはシエリーです。

アルヌス方面への道が封鎖されていたので菅原様も一緒です。

「盗賊が横行してるらしいね」

チチは、あっけらかんと言います。通過した村々の雰囲気から治安は急速に悪くなっているのが肌で感じます。中には落ち武者狩り宜しく、私達自身を捕らえようとする動きすらあって、慌てて村を夜逃げしたって事もありました。

習志野三尉は目立つ自衛官の制服を脱ぎ、平民風の装いでしきりに周囲を警戒しています。ただ、この服も盗品ですから私達も似た様な者ですね。

「あれは何でしょう?」

私は背負つて貰つてゐる菅原様の背中で見ました。明らかにカタギとは思えぬ男共が藪に潜んでこつちに窺つてます。

「ちつ」

舌打ち。それとほぼ同時に男共は、わつと左右の藪を飛び出してきました。

野盗ですね。旅人が少しでも隙を見せると、連中はハイエナみたいに襲つてきます。我々が組み易しと見て獲物に定めたのでしよう。

「シエリー、降りて!」

私は菅原様に背負つて頂いていたので、彼の動きを阻害してる事は否めません。

その背中から慌てて降ります。

「うぬっ」

とつさにベルトに挟んだ拳銃を抜き、賊共へ向ける姿は鼻眉目に見てもカツコイイです。

「あれ、あれ?」

しかし、彼の銃はいつまで経つても火を噴きません。

「スライドを引いて、安全装置を外すんだよっ!」

叫ぶのはチチ。チチは大型拳銃のレバーみたいなのがちやりと後ろに引くと、けたた

ましい音を立てて、銃弾が吐き出されます。

チチの正面に居た盗賊が数人、血しぶきを上げて倒れていきます。右手から攻めて来た賊は、これで壊滅ですね。

習志野三尉の拳銃も発砲され、左手側の白刃を持った賊がもんどり打ってひっくり返ります。この予想外の損害に士気が崩壊したのか、遁走に移る賊徒共。

習志野三尉は無言で手榴弾を取り出すと、ピンを引き抜いて投擲します。

それは敵の真ん中で炸裂。この戦いは敵の全滅で終結しました。

「怖かったろう。しかし、慣れない武器は持つ物ではないな」

自嘲気味に呟く菅原様を、私は否定しました。

「それでも菅原様は、私の騎士様です」と。

そして徒歩での移動は危険度が高いと判断した我々は、次の村で小さな荷馬車を購入したので。敵が騎馬でなければ振り切れますからね。

<ここで解説>

菅原の黒背広は目立ちますが、服泥棒を嫌がった為に着替えてません。それ以上に目立つ、自衛隊の緑の服はさすがに…。

本当は制服を脱ぐと国際法上「正規兵ではなく、ゲリラと化す」為に駄目ですが、習志野三尉は「特地に国際法はナンセンス」と現実主義者でした。

ラジオ

<16>

シエリーです。紆余曲折ありましたけど、何とかテユエリ領に辿り着きました。

私達は領主館に早速入ると情報収集に努めます。でも…。

「最悪な状況ですね。和平はこのままでは水の泡だ」

菅原様は呻いています。きっかけは日本製の携帯ラジオ。珍品として行商人が持ち込んできた物を我が家がい取った物ですが、に流れる情報でした。

どうやら日本はアルヌスにラジオ局が設置した模様で、ここから日本側の流すニュースがダイレクトに入るので。

それによると、日本国内の世論は帝国討つべしの機運が高まって、最早、誰も止められない大きな奔流となってしまうているのです。

事の起こりは翡翠宮救出戦。

その中で若干名の犠牲者と捕虜を出してしまった。その結果、特地の常識ではごく当たり前の行為なのですが、見せしめとして帝国側が遺体や捕虜に対して行った行為が決定打だったみたいです。

槍を突き刺し全身に傷を与えて骸を晒すとか、オーガーに生きたまま捕虜を食わせてしまふとかは衝撃的だったのでしょうか。

自衛隊の撮影したこれらの映像は、何度もニュース番組のトップ飾ったそうです。

あれほど自衛隊派遣に反対してた野党が、掌を返す様に派兵を強硬に主張し始めます。大衆の声に迎合するポピュリズム。見事な変わり身ですね。

「お茶でも如何ですか？」

とお母様。菅原様を氣遣つてお茶をお勧めしています。

「幸い、我が領に帝国軍は侵攻する気配はありません。戦が終わるまで逗留なさると良いでしょう」

お父様もそう言いつつ、日本の外交官を引き留めます。

我がテュエリ伯爵領は日本寄りの中立を宣言しました。原作通りなら、ここでピニャ殿下率いる新政権が誕生して、和平派の当人も当然、参加する筈なんですけど、いつまで経つてもアルヌスで樹立したとの情報が入ってこないのです。

これはアルヌス方面へと脱出したカーゼル侯爵と連絡を取り合ってますから間違いないありません。

和平相手の受け皿がないので、このままだと全面戦争は避けられないでしょう。

「伊丹達が、殿下解放とかに失敗したんだろ」

やきもきしてる私に、冷水を浴びせたのはチチでした。

「ゲーム通りのフラグが立てられると考えちゃいけないね」

「貴女は…」

理不尽な怒りですけど、それを翼人の娼婦にぶつけます。

「貴女は、一体何者なんですかっ！」

「チチ・モスココーミュールだよ。河岸を変えようか、ご両親と菅原が変な目で見ている」
彼女は流し目で見つめると、率先して部屋の外へと向かいます。

私は彼女について行くしかありませんでした。

<ここで解説>

アルヌスからラジオ放送がされているとの設定は、その内、日本の電機メーカーが特地へ携帯ラジオを売りまくる予定があったらうとの想定です。

電力事情から手回し型やソーラーパネル型中心だろうけど、副次的に乾電池の需要も見込めますから、良い商売になりますよ。

その前段階として試験放送みたいな事をやってたり。てな感じですね。

転生者

<17>

チチは私の私室に入ると振り返ります。

「あたいは転生者さ。多分、あんたよりも後のね」

煙管を取り出してPXで手に入れたと自慢していたライターで火を付けます。ZI
POOでしたっけ。銀色の風帽付きオイルライターです。

「後？」

「転生者は同じ時期。同じ時代の者が都合良く現れる訳じゃないのさ」

そして「原作やゲームの『GATE』を知っている者が必ずしも現れる事は無い」とも告げる。

「例えばミードなんかは原作の存在を知らない。しかも21世紀に生きた記憶も無いのさ。びっくりしたね。彼女は昭和時代からの転生者だったんだ」

少なくとも『GATE』（げて）は平成に入ってから書かれたラノベだ。

しかもミードはWebと言う観念を持っていなかった。「ゲーム。ファミコンかあ。あ、パソ通なら知ってるよ。んなマイナーなところで小説書く者好きもいるのかあ」レベ

ルだったという。

「だから、あんたよりもあたいは後の時代に生きていた。と言えば分かるかい」
混乱気味でしたが、私は首を縦に振ります。

「前、あんたはファンディスク3まで把握してると言ってたね」

「はい」

紫煙を吐く。

「実は、その後に続編が出ている」

ええつ。そんなのアリですか。

私は脳天に、100tハンマーを叩き付けられた様な衝撃を受けたわ。

「多分、そいつがあんたの感じていた違和感の主な原因だろうね」

ちよつ、ちよつと待って。あたしの知らないストーリーなり設定とかが、この世界に出回っているの？

「無論、それだけじゃない。ここは既に『GATE』（げて）の世界その物じゃない。何人も転生者によって、既に影響を受けてる世界なのさ」

幸い、チチは『GATE』（げて）の原作を知っている派だったんだけど、しかし、あたしの知らない未知の情報は出してくれなかった。

何本のゲームが追加されたのか、内容はどんな物なのか。

ただ、こっちの必死さに根負けしたのか「おまけしてやろう」と、原作が何作かの外伝まで出ている事を告げたのよ。

「把握してる限りじゃ、10本までは出てなかった筈だよ。あたしが現世で生きてた間の話だけだね」

チチより未来のディスクが出てる可能性もあるのね。あ、頭が痛いです。

「では、登場人物の名が少し違っているのは？」

肩をすくめる娼婦。

「あたしだって、全ての謎を知ってる訳じゃない。

それはあんたがこれから調べる事だ」

と翼人。煽情的なスタイルで机に腰掛けます。

「ただ、一つ言える事はこれから先の未来にマニュアルがないって事さ。あんたらしさを發揮して、未来をつかみ取っていけばいい」

自分らしさ？

でも、自分らしさとは何でしょう。私は…。

<ここで解説>

チチが言っていた「既に影響を受けている世界」とは。

つまり『GATE』を知る何人も転生者がフラグ折りやら何やららかしてるから、

当然、その結果を受けて、例え最初はゲーム通りの運命を辿る世界であったとしても、徐々に世界は「本来はあり得なかつた」因果を受けて、ゲーム通りには進まなくなる。つて事です。

帝都攻防戦

<18>

チチに「自分らしく生きてみる」と言われて、改めて私は悩んでいます。

そう、自分は何者なのか。

シエリー・テユエリ伯爵令嬢？

いえ、気が付いたらあたしはシエリー・テユエリになつていた。

誰かに与えられた形で、突然に。あたしはこの世界に放り出されたのです。

勿論、シエリーとしての幼い時の記憶はあります。

でも、それはこの少女本来の記憶。今の私が経験した物ではありません。私はこの小さな女の子の意識を乗っ取つた形で、性格を上書きしていたのです。

では本来のシエリー。つまり、我が儘で甘えん坊の貴族であるお馬鹿令嬢は何処へ行つてしまったのでしょうか。

あたしが殺したのではないのでしょうか？

あたしに、21世紀の元日本人に。

そんな事に関係なく、歴史は動いています。

動員され、増強された自衛隊は遂に帝国軍との全面戦争に突入してしまいました。アルヌス方面から進撃を開始した機甲連隊を中心に、帝都前面に展開していた部隊は瞬く間に蹴散らされます。

戦車砲が唸り。ロケット弾が地を舐め。無数の銃口が鉄の暴風を噴きまくる。実際、殿下が動員可能だった軍は全軍勢の半分程。残りは面従複背で戦線へは到着しなかつたのですが、それでも三万の兵が犠牲になりました。

殿下が期待を掛けていた自慢のジャイアントオーガーも、近代火器の前には瞬殺です。

自衛隊は帝都を包囲。一旦、そこで進撃を中止して持久戦へ入ります。補給を絶つて、じりじりと締め上げる作戦ですね。

時々、嫌がらせに宮殿へ砲撃を撃ち込んで神経戦を仕掛けているようですね。

原作と違って、これでは殿下は都落ちを出来ません。チチが言つた通り、本当に歴史が変わつてしまつているのだと、私はほんやりと自覚していました。

そう、情報は逐次入つていきますけど、その当時の私は、腑抜けの様にそれを聞き流していたのです。

「シェリーさん。私、部隊へ復帰する事になりました」

私の私室。いえ、今は執務室と言つた方が近いのですが、に習志野三尉がやつて来ま

した。かちんとブーツを鳴らし、久々に袖を通した自衛隊の制服姿で敬礼しています。「原隊と連絡が付いたのですか？」

ばつつんな切り揃えた前髪の下、口紅を塗った様に真つ赤な彼女の唇が「はい」と動く。

「帝都防衛戦で帝国の哨戒が絶えたから、どうにかアルヌスとコンタクト出来ました」

そう言えば、撃墜される脅威が薄れたから飛竜便を再開したのだった。

「おめでとうございます。それで出発は？」

「明日の予定です。朝一の飛竜便に同乗してアルヌスへ向かいます。それで…あの、言いにくい事なのですが、菅原氏も本省へ復帰するらしいです」

それは覚悟していたわ。

習志野三尉と同様、彼もテュエリ領には本来居てはいけない身です。

でも、菅原様自身からの報告はまだありません。私にシヨックを与えない様に、無言でこの地を去るのかも知れません。

悩み、何も手が付けられなくなった私を氣遣つて。

「お待ちを！」

「お嬢様は執務中です。お待ち下さい」

あら、廊下が騒がしいわ。私と習志野三尉が顔を見合わせる。

「シエリーっ！」

扉が乱暴に開き、飛び込んできたのは小さな闖入者。

ええと、確かレミー・マルタン伯爵令嬢？

<ここで解説>

もしかして自衛隊VS帝国軍の戦闘を期待なされていた方、描写があっさり目で申し訳ありません。

本作は1000字前後縛りな物で詳細な描写すると、大規模戦闘描写をやったら戦闘シーンだけで1、2話が潰れてしまうんですよ。

「どーん」や「ダダダダダ」「しゅばっ、しゅばっ、どかーん」等の擬音を多用するって手もありますけどね。

『GATE』（げて）の自衛隊はパラレルワールドなので、74式105mm自走榴弾砲やT4改造COIN機（簡易爆撃FCS付加して、パイロンにガンポッドとロケット弾ポッド載せただけ）なんかも出したかったなあ。

闖入者

<19>

目の前に現れた黒髪のが強そうな女の子。

レミー・マルタン。

確か従姉妹です。ええと：そう、昔、帝都で行われたピニヤ殿下主催の園遊会で、私にこれ見よがしに真珠のネックレスを自慢していた。

確か、あの時はまだ、私があたしになる前のシエリー・テユエリだった筈です。「貴女の家の方が格下よ」や「田舎者」とか、散々酷い言葉を並べて、このレミー嬢を当時のシエリーは苛めていたんでしたっけ？

他人を見下す、本当に嫌な我が儘娘でしたからね。

だから、あの園遊会で真珠のネックレスを自慢されて、物凄く悔しかったんですよね。自分より格下の女が、これ見よがしに自慢していると。

そこへ、突然、あたしが降臨してしまった。

「ちよっと、聞いているのー！」

その怒声に、はっとなつて意識を戻します。

済みません。貴女が何を言っていたのか、全然耳に入っていないませんでした。

こんにちはシエリーです。

執務室に突然現れた闖入者は私の従姉妹でした。

今までに掴んだ情報から、現在、マルタン家の一家はバスーン刑務所送りになってた筈ですね。原作、つまり『GATE』（げて）では、かの一族は描写は園遊会のそれだけで、その場限り、名前すらないモブでした。

ゲーム版。つまりゲーム化された作者公認の二次創作で、シエリー主役ルートにてレミー・マルタンなる名が付けられ、シエリーに苛められる被害者その1に昇格したのです。

ちなみにシエリーが悪役令嬢ブレイをひた走れば、このレミーの他、カミュやコアントローなんかの今まで苛めてきた女の子達に復讐され、悪所で死ぬのがバッドエンド。

ゲームではマルタン家の両親らもバスーン刑務所送りになりますが、自衛隊の解放作戦で無事に脱出を果たしていますね。

しかし…。

「何であんたが死んでないのよ」

「良く分からないけど、何か逆恨みをしている様な…。ねえ、お嬢ちゃん」

困惑気味の習志野三尉は取りなそうとしています。

でも、レミーはそれを無視して叫びまくります。

「なんであたしの両親が解放されないのよ。変だわ、おかしいわ。どうなってるのよ！」
ええと、反応が変じゃないですか。レミーさん。

「自衛隊がバースーン監獄を、攻略してないせいだろ」

と声を掛けたのは、いつの間に執務室に入ったのかチチです。

「そんなの変よ。変よ。あたしはフラグ通りの行動をしたのに、何でこいつがのうのと生きて、しかもテュエリ夫妻まで無事なのよっ！」

ついに「こいつ」呼ばわりですか。しかし、自分は確信しました。私はチチに『もしかして』と視線で問います。チチも視線で『是』と返してきます。

ああ、このレミーも転生者なんだ。

<ここで解説>

レミー・マルタンの名もお酒から。

カミュとかコアントローも同様。

レミーが黒髪の女の子って設定は、アニメ版『ゲート』の園遊会描写からです。

スピンオフ作品

<20>

習志野三尉を執務室から出して、改めて私はレミーに向き直ります。

「転生者。だね？」

チチはレミー・マルタンへ問いかけました。

「そうよっ！」

「転生者とは何か分かりませんが、お尋ねします。何をそんなに怒っているのですか」
これは嘘です。しかし、包み隠さず自分もまた転生者であると、敵対する目の前の小娘へ馬鹿正直に教えるつもりはありません。

レミーはむすつとした顔をしてあたしを睨み付けました。その雰囲気から察する限り、シエリーへの好感度はゼロですね。

「いつから、今の自我になったんだい？」

チチが尋ねます。まず、気になるのはそれでした。

「…三つの…3歳の誕生日の頃からよ」

えと、シエリーとレミーは大体同じ歳でしたよね。確か現在は12歳だったから、貴

女は9年も前に転生したのですか！

「そうよ。あたしはここが『GATE』（げて）の世界と知って努力したのよ。シエリー、小憎らしいあんたをせせら笑う為にね！」

目の前の黒髪の娘は、身体を震わせながら続けます。

「フラグをひたすら守って、あんたを破滅させる為に計算して、途中まで上手く行っていたのに、どうして悪役令嬢を止めたのよっ」

その叫びに私は困惑しました。

「そっか。あんたはファンディスク5がある世界から来たのかい」

ファンディスク5ですって？

煽情的な格好の娼婦が説明を付け加えてくれます。

『GATE』（げて）のファンディスク5。

苛められ令嬢のレミー。

アルヌスにある酒場の主人メスカル。

そして薔薇騎士団の百合で腐女子騎士ストーリーチナヤ・エ・リモーヤナだっけかな、が各々メインの作品だよ」

ファンディスクは端役達のスピノフ作品です。伊丹達メインでは無く、本編では無名だった者達に光を当てるサイドストーリー編と言えるでしょう。

私もファンディスク2でプレイヤーキャラクターになった口です。本編では単なる脇役であった存在だったのです。

でも、5になると本当に脇役達が主役なんだなと実感しますね。レミーとかは3のシエリーで付け加えられた後付け設定のキャラだった筈ですから。

「！ そう言えば、何であんたが転生者の存在を知ってるのよっ！」

突然、気が付いた様にレミーはチチに噛み付きます。あ、彼女もチチの事を知らないんですね。あたしの知識になかった登場人物。

「鈍いね。あたしも転生者だからだよ。あたいを知らないって事は、あたいより先に現世から消えたね」

それを聞いたレミーは呆然としていましたが、次第に肩を震わせて何かぶつぶつと呟き始めました。

「そうか……」

呟きに次第に笑いが混じり始めます。

「その女に入れ知恵をしたのはあんたね」

ええと、これってやばいパターンなのではないでしょうか。

「許さない。あたしは悪役令嬢を蹴落として、『ざまあ』して最高の幸せを手に入れるハッピーエンドを迎える予定だったのにつ」

懐中から小振りのファルカタ（短刀）を引き抜くレミー。

「止めときな。あんたは世界を支配する主人公じゃない。ここはゲームの世界その物じゃないんだ」

対する翼人は焦っていません。あくまで自然体で、いえ、どちらかと言えば哀れみの視線を向けてレミーと対峙していますね。

「きゃあああああっ！」

白刃を煌めかせて振り上げる姿に、私の悲鳴が上がりました。

<ここで解説>

ここまで書いていて思いました。チチって使い易いキャラだ。

最初はミードをその立ち位置に付ける予定で、単にミザリイさんのキャラとして設定したんですけど、取りあえず何でもこなせて使い勝手が異様に高い。

思わぬ、つか、嬉しい誤算であります。

もう少し、まともな名前を付けてあげるべきだったかな。

病床

<21>

最初の一撃は空振りでした。チチは完全に見切っている感じですよ。

私の悲鳴と共に執務室の扉がぼんと開き、黒い影を持った誰かがレミーに体当たりするのが目にと映ります。

「シエリーっ」

菅原様でした。突き飛ばされたレミーはたたたらを踏んで振り返ると、ファルカタを胸の位置に構えて、そのまま突進してきます。

「危ないっ」

その叫びは通じませんでした。レミーは菅原様に激突して凶刃がその身体を貫きまします。ゆっくり崩れる大きな身体。私は半狂乱になって呆然と立ち尽くすレミーの顔面へ、ストレートパンチをお見舞いしました。

シエリーです。

菅原様は一命を取り留めましたが、当分、絶対安静ですよ。

レミー・マルタンは習志野三尉に取り押さえられ、その後、牢獄の住人となっています。

す。

本当は菅原様の持ってた拳銃で、彼女を撃ち殺したい殺人衝動すら湧き上がったのですが、菅原様が止めてくれました。

息も絶え絶えなのに「手を血で汚してはならない」と伝えた後、それからずっと昏睡状態が続いています。

私は彼の傍らで不眠不休の看病をしましたが、遂にダウンしてしまいました。

その間にも状況は動いています。

私達の都合なんかお構いなく。

アルヌスではデュシー候とカーゼル候が中心となり新政権が樹立されました。

表向きはモルト皇帝を頂く臨時政府ですが、肝心な皇帝や皇族が囚われの身で在る為に正当性が足りません。

そして自衛隊の帝都包囲は続いています。

「帝都は悲惨な状況らしいね」

そう述べるのは、あたしの寝台の脇に立つセイレーンです。鉾山計画とか、発明品の進展具合などを報告に来たのです。

「流石に降伏した難民を撃つ事はないでしょう？」

自衛隊は帝都を包囲するだけで進撃を一切取っていません。時々、砲撃するだけで

す。仮に攻勢に出た際の人的被害と物資消耗を計算して、侵攻は不経済だと割り出した結果でしょう。

でも、帝都への物流は完全に止めているから餓死者が出ているのです。元々、外からの支援がなければ帝都の食料供給は成り立ちません。飢えに耐えかねた市民達は続々と帝都を捨て自衛隊に降伏しています。

「んー、これまでの自衛隊はね」

ミードはため息をついて天を仰いだ。

「問題なのはゾルザルの馬鹿が、怪異ダーを難民に紛れさせたんだよ」

言葉を失います。紛れ込んだ怪異との区別が付かないならば、身を守る為に無差別に発砲するのは目に見えていました。しかし、それを誰が責められましょうか？

「でも明るい話題もある。ようやくピニヤ殿下を保護したらいいとの話も入ってる」
「えっ?」

「伊丹隊の活躍らしいよ」

これで臨時政府は旗印が揃い、今後は彼女を盟主として反ゾルザルに動く事になるのでしょうか。一刻も早く、日本側の交渉窓口として機能してくれる事を望むだけです。

「ま、政治の事は良く分からないし、君らの言う『ゲーム』の事もあたしは完全に理解しているとは言い難いんだけどさ。」

あんまり思い詰めずに、まず目の前の事を片付けない？」

「それは…」

ミードはじつとあたしの顔を注視します。

「転生しようが何だろうが、あんたは現在（いま）、生きているからさ」

〈ここでも解説〉

習志野三尉は無事に原隊に復帰しています。

決意

<22>

お久しぶり、シエリーです。

今、私は屋敷のドンジョン（牢獄）へと足を踏み入れてます。

狭い曲がりくねった急な階段を昇り、最上階を目指します。

下賤な囚人を収容するのは地下牢ですが、高貴な者を収監するのは塔であると昔から相場が決まっています。これに従い、レミー・マルタンも我が家の尖塔に捕らえてあるのです。

「なごよ」

最上階にある小さな部屋。それを開いた時の第一声がそれでした。

部屋は鉄格子で半分仕切られ、奥にレミーが粗末のベッドに座ってこちらを睨んでいます。同行したチチとミードは苦笑していますね。

「マルタン夫妻の死亡が確認されました」

私は事務的に事実を告げます。今朝、届いたばかりの情報で、ようやくバスーン監獄が自衛隊に降伏したからです。

原因は餓死。マルタン夫妻だけではなく、多くの収容者が命を落としました。監視する側も食料不足が深刻で、幽鬼の様にやせ細っていたそうです。それに耐えられなくなった看守は徹底抗戦を主張する政治将校や上官を殺して、自衛隊に投降したのでした。

「そう。でも、どうでもいいわ」

小さな囚われ姫は素っ気なく答えます。

「あのさ、両親が死んだのに、その言い草はっ」

それを「ミード」と制したのはチチでした。

「それよりも貴女よ。変よ。変だわっ、あたしが頑張って9年間頑張って立てたフラグをどうして叩き折るのよっ」

続けて「こいつにとつて両親はNPCにすぎないんだよ。只の背景。書き割りみたいなもんさ」と、翼人は悲しそうな口調で呟きます。

「前にも言つたろう。ここは『GATE』（げて）の世界であつて、ゲーム通りに全ての予定が決まつてる世界じゃない。9年間、知っているゲーム通りの未来を歩んだのは、ご苦労さんとしか言い様はないけど…」

チチがレミーに向ける目は哀れみを伴っていましたが、やがて決心した様に言葉を継ぎます。

「その間、あんた。レミー・マルタンは自分の人生を歩いていたのかい？」

ああ、と私は前に病床でミードと面会した場面がフラッシュバックします。

「前世の細かい事はどうでもいい。シエリー・テュエリって女の子は、今世に生きてる一人の女の子だろ？」

二度目の新たな人生なのだから、ゲームとやらに縛られる必要は無いのだとセイレーンは告げたのでした。

「ミード・ルナ・トデイはあたし。前世の記憶を持つてるけど、今のあたしはミードと言う個人だよ。君もそうだろ、シエリー・テュエリ？」

続けて私が元の、つまり転生前のシエリー・テュエリを抹殺して乗っ取ってしまった悩みに触れ、「気にしちやいけない。気に留める必要は無論あるし、後悔の気持ちも忘れちやいけないのは確かだけど、そうしていても何も解決しないよね。だから君はシエリーとして、受け継いだこの身体を引っ張って行く責任があるんだ」と告げます。

強い。強いなミードは。これが昭和世代の強さなのでしょうか。

「ま、あたしとしてはスポンサーの君が停滞してちや、自分の行う計画を思い通りに進められないってデメリットがあるからなんだけどね。にやははは」

これは「単なる我が儘かもね」とミードは告げて、各種計画の話へと持つて行つたのでした。

レミーはゲームの下僕になり果てていました。

その行動に本当の意味での『自分』はないのです。与えられた役割に終始し、未来をつかみ取ろうと行動する事もなく、他者を恨み、嫉むだけのクレーマーに。

あたしは決心しました。例えゲームとしての指針がないにせよ、前へ進もうと。

そして、今を生きるシエリー・テユエリとして後悔しない人生を歩もうと。

<ここで解説>

シエリー、やつと闇を抜けました。ミードの大雑把だけど楽天的な前向きさが、シエリーに力を与えた模様。

いや、それが本当に昭和世代の強さなのかは。疑問ですが（笑）。

自衛隊の包囲作戦。

多分、バーストン監獄と同じ様に士気瓦解した部隊が集団投降している筈です。

政治将校を討ち取ってね。

大団円

<23>

帝国軍は瓦解しました。

いえ、正確には帝都の、ゾルザル配下の帝国軍は。ですね。

ゾルザル殿下は宮殿で砲弾を受けて亡くなりました。嫌がらせに過ぎない砲撃が首魁をあつげなく仕留めたのは皮肉です。

既に指揮系統が支離滅裂で、内部分裂を起こしていた帝国軍はあっさりと帝都を開城。ここに戦争は終結します。

そう言えば、テューレなる女人は殿下の側には見当たらなかった模様です。ただ、後に兔族の奥さんを伴った板前自衛官を見かけたとか、なんとか。

現在、帝国の首都は臨時政府があるアルヌスへと移り、ピニヤ殿下が今後の代表となる事に決定してます。

ここにピニヤ殿下の政権を正式な帝国政府とする事で、日本との和平が成立したのでした。

そして…。

あれから二十年が過ぎました。

「製鉄技術の向上が目下の課題だね。反射炉があと幾つ必要なのやら」

「後装銃の施条が三本なのは何とありませんか？」

「量産化の為の尊い犠牲だね。ま、暫くは我慢だよ」

「ローマンコンクリートの発注が滞つてるとき。施設科から文句が」

ミードの率いる開発局は、相変わらず忙しそうですね。

様々な新技術。地球から見たら時代遅れも甚だしいのですが、それを次々と実用化して、我がテュエリ領に富国強兵をもたらしています。

転生者を積極的に集め、農地の発展。特産品の開発なんかも行い、我が領は周りから見れば、飛躍的に発展しています。

「伯爵夫人、テラスで伯爵がお待ちです」

「ありがとうございます」

それを伝えてくれた家令に、私は感謝の言葉を示すとテラスへと上がります。

既に父と母は私達、新しい世代へと職を譲って引退しています。

私は結婚しました。そして夫は…。

「菅原様っ！」

私は小さな頃の様に駆け寄って夫に抱きつきまします。旦那様は「おやおや。未だにその

呼び方なんだね。そろそろ浩治と呼んで欲しいな」と苦笑しつつも抱きしめてくれます。

コージ・スガワラ・テユエリ伯爵。彼は一命を取り留めた後、門の閉門に遭遇して、こちらへ取り残されてしまったのでした。

私の夫としてテイエリ家の養子となり、今は帝国議員としても活躍してますが、これには訳がありました。

原作では門は再び開くのですが、この世界ではそれは起こりませんでした。

重要な役割を果たす筈の伊丹ら一行も、亜神ロウリイ聖下以下、丁度、全員が日本へ向けて旅立っており、こちらへ帰還する事もなくそのままになっています。

噂では神の誰かが策を巡らせたとも…。

自衛隊の特地駐屯地も大混乱に陥りましたけど、為す術もなく、今では独立国家として成立しています。その『日本』国から帝国との折衝役として、こちらに残されていた我が夫が起用され、帝国議会へと送られてしまったのは仕方の無い事なのでしょう。

「今度は何日ゆつくりされますの？」

その功績から、夫は正式に貴族院議員に選出されてしまい、今では帝都と我が家を行き来する忙しい身になってしまいました。

「四日は大丈夫。ああ、でも通信が高速になったのは不便になったな。前は連絡が届か

なかったとか理由を付けてサボれたんだけど」

セマフオア（腕木）式の視覚通信網が発達してる今、帝国全土ならば僅か半日で、何処へでも通信連絡が取れるようになっていきます。便利になった反面、こうした弊害（？）も出てしまうのです。

「そつちは大事ないかい？」

「ええ、領内は平穩。問題はありません」

「そうじゃない」

菅原様は私を抱き寄せます。そつと私に腹部に触れて優しく撫でてくれます
「生まれる子供の方だよ」

どちらともなく顔が寄せられ、唇が重なり合いました。

私はシエリー。もう悪役幼女ではありません。

これからも私は私の人生を、しっかりと歩んで行きます。

<FIN>

<ここで解説>

一応、悪役幼女はこれで完結ですが、あと一編エピソードがあります。
もう暫くおつきあい下さいませ。

エピローグ

<24>

チチ・モスコミュールは何処とも知れぬ空間に居た。

ここに召喚されたのは何度目か。もう覚えてないなど独りごちる。

最初に『GATE』（げて）の世界に来た時は驚いた。既に転生者が何人も現れて、ゲームの登場人物と入れ替わっているのを知ってびっくりした。

「そこに居るんだろ。神様」

名も無き神。いや、名乗らないだけで名はあるんだろうとチチは推測しているが、に對して娼婦は呼びかけた。

「ご苦労様。今回はどうだった？」

空間全体から思念が発せられる。あくまで自分に姿を晒す気は無いらしい。「何を今更。全てお見通しだろ。」

最初に転生した時は皇女としてピニヤに成り代わろうと努力した。

二度目は悪所の情婦で何が何やら分からない内に、あつという間に殺された。

そして三度目、四度目だろ。あんたがあたいに何をやらせたいのか、さっぱり分から

ないけどね」

クスクスと笑い声。

「いい加減、何度も記憶を持ったまま、同じ時代、同じ時間に生まれ変わるのには飽きてるんだけどね。これは何かの罰なのかい？」

「違う。君は神の実験に協力している。まあ、被験者みたいな存在だよ」

「被験者？」

「同時にその事象を観察する、観察者でもある。だからそれに必要な力も与えてある」
要らねえ。とチチは嫌悪した。

「だから君は、私の亜神なんだよ。特殊なね。不死身の力を持つ形が、転生と言う方法になっっているんだ。」

「だから君は死なない。死んでも別人として同じ時代に甦る」

身勝手だ。

神なる存在にとって人間なんぞ弄ぶべき者なのか。理不尽だ。理不尽すぎる。

「くそつ、きつと破ってやる。この閉じ込められた時間の牢獄を、あたいは必ず打ち破ってみせるよ！」

ぐらりと空間が揺れ、そしてチチは自分の寝台で目を覚ました。

チチが叫ぶのを、満足そうに時空神は見下ろしていた。

今回の世界は上手く安定しそうだった。

地球人が『GATE』（げて）の世界と思い込んでいる並行世界。それは元々、彼（彼女か？）の管理下にあった世界の一つだった。

異世界の作家にそれをweb小説として書かせ、更にゲームとしてヒットさせたのも彼の策略であった。多数の人間が同じ世界を、同じ物語を認識する共同幻想。大勢の他者を別世界へ転生させる為には、それがどうしても必要だったからだ。

全くの未知の状態より、ある程度見知った下地がある方がその世界に同調する為に、すんなりと転生させやすいからである。

例えば、伊丹みたいなハーレムを築きたい。ピニヤみたいな素敵に姫に憧れる人間を、その人物と置き換えるのは容易なのである。

実はその世界、仮に『げてワールド』と呼ぼう。は滅亡に瀕していた。

魂をコレクションする悪癖を持つ神々が登場し、世界に生まれてくる者が劣化してしまつたのだ。つまり、閉じた世界の中で転生が上手く行われないのである。

世界は活力を失い。社会は停滞して遠からず滅ぶのが確定している。

尤もあの世界は神々に頼りすぎる連中が余りにも多く、自己努力が足りないのも原因であるが。

故に異世界から新たに魂を呼び寄せ、世界を活性化しようとしたのが門だ。だが、そ

れだけでは世界は変革しない事を時空神は悟っていた。

「もつと、世界全体を引っかけ回す。パワフルな存在が必要だ」

それが送り込んだ異世界からの転生者だった。

世界をアクティブにぐいぐいと引つ張って行き、今までに無い結末を作ってくれる者。

違う未来を見せてくれるかも知れない者。

「しかし…。大半がああのレミーの様に原作に拘ってしまふのだな」

だからワザと人物の名称もちよこちよこ変えて、ここはパラレルワールドだと親切に知らせてやっているのだが。

失敗した世界の方が多かった。むしろ一割でも成功すれば良い方だろう。

では次の分岐、次の並行世界を準備しようか。設定は門が開く10年前からだ。

「さて、次の世界はどうなるのかな」

シエリーの物語は終わった。彼女はちゃんと世界を変革してくれたから、もう干渉する気は無い。このまま生を全うし、輪廻転生しても記憶が受け継がれる事もない。

だが、途中退場した魂は再び表舞台に立って貰おう。

そろそろ最初に門を開けずに進む話や、帝国が地球を圧倒する結末とかも見てみたい物だが…。

あたしの名はレミー・マルタン。

って、えっ。獄死したはずよね。シエリーのうちの塔の中で病をこじらせて。

医者なんか要らないって固辞して、このゲームが間違ってるからリセットするんだって。

ここ何処？ 何処かの邸宅みたいだけど、そっか、無事にリセット出来たのね！

ええと、あたしは12歳でリープ・フラウミルヒ。男爵令嬢。

ここはフラウミルヒ邸。

って、ああっ、どうなってるのよ。あたしはレミーじゃないの!?

…そしてまた、新たなる物語が幕を上げる。

〈完〉